

新たな教師の学びを支える 研修システム

～小小連携・小中連携の取組～

1 はじめに

本市では、以前から幼・保・こ（こども園）・小・中・高での連携した学力向上推進会議を実施しており、縦のつながりを意識した取組を行っています。一方で、各小学校同士は、市が実施している集合学習や一部の学校同士のつながりのみになっていました。また、ほとんどの小学校は小規模校であり、同一校の少人数の職員で研修を行なっている現状がありました。そのような中で研修を深めることは難しさがあり、教師としての主体的・対話的で深い学びの実現に向けて手立てが必要でした。

そこで、職員研修を柱とした小学校同士横のつながりを強固にし、教師のより多様な見方・考え方をもとにした研修と同僚性の深まりを目指す体制を考えました。これが小小連携・小中連携の取組です。

2 小小連携・小中連携システムの確立

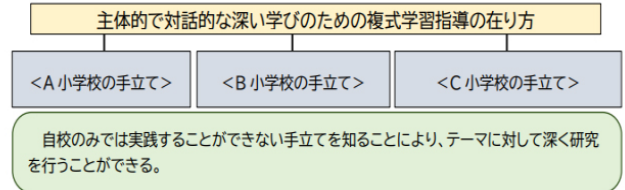
本市の学校は、小学校10校、中学校1校です。連携校は、地理的な距離や、学校規模を考慮した上で決定しました。取組み方は、図1のように研究テーマを同じにしながら学校ごとの手立てを設定したり、同様の手立てをとりながら学校ごとのテーマを設定したりして取組むようにしました。

小小連携・小中連携は、本市の重点取組のため、管理職研修会や教育課程説明会、宣誓式等では、必ず指導・説明しています。

2 連携校の決定について

(1) 研究テーマが同様の学校同士の小小連携

【例】研究テーマ



(2) 研究の手立てが同様の学校同士の小小連携

【例】A・B小学校の手立て

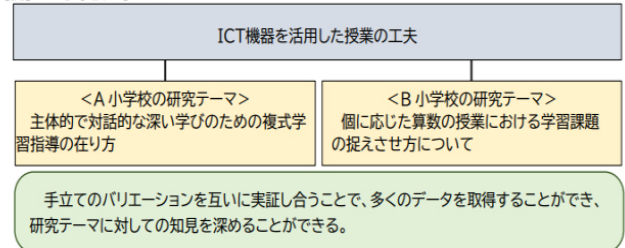


図1 「連携に向けての取組み方」

3 実践例

(1) 現和小と安城小の連携（小小連携）

現和小と安城小はどちらも完全複式学級であり、市全体で取り組む前から自主的に連携を進めており、先進的な実践を行っています。令和5年度には県から令和6年度には文部科学省から優秀教職員団体表彰を受けています。

ア 小規模校のデメリット解消①

「多様な見方・考え方に触れる合同協議」

両校は、教育課程への小小連携の位置付けを図るとともに、年度当初に、担当者を中心に教育課程をもとに、ねらいと方向性の確認を行いました。また、5月には現和小の校内研修に安城小の全職員が参加し、研修テーマ

の考え方や今後の方向性などを合同で確認しました。ここでは、協議人数が増えたことで、グループ内での発言や質疑では効果的な資料の提示の仕方や児童に思考させる時間設定など多様な意見が出されるとともに、リラックスした雰囲気のもと両校職員の同僚性が高まりました。



写真1「両校での合同協議の様子」

イ 小規模校のデメリット解消② 「ファシリテーターとしての参加」

現和小で実施された市の研修会において、安城小職員が、分科会全グループ協議のファシリテーター役を務め、個別の見取りや授業の流れ確認、付箋を活用した授業研究など、分科会の推進役として研究協議を進めました。



写真2「研修会でのファシリテーター」

ウ 小規模校のデメリット解消③ 「専門性を生かした人材活用と連携校での 検証授業」

安城小で行われる研修会の準備として合同で事前研修会と検証授業を行いました。

安城小の校長が前年度まで県の人権同和教育課に勤務していた専門性を生かし、両校合同での人権同和教育に関する研修会を実施しました。

また、安城小で行われる研修会の事前授業として、安城小の教諭が、現和小6年への乗り入れ授業を実施しました。研修会前の授業研究を通じた指導の手立てや実践の事前検証です。当日は、現和小の同学年での検証授業であったため、実態は違うとは言え、授業構成や児童の反応など指導の在り方等を実践的に検証する機会となりました。同じ学年に複数の学級がある学校では、同じ学習指導案で事前に検証可能です。しかし、本市のように小規模校もしくは複式学級の場合、事前検証は難しい状況があります。そこで、小規模校同士が研究実践に係る授業を進める上において、互いの学級で授業を行うメリットはたいへん大きいです。

今回の取組は、自校の児童への発問・板書等を想定した授業の構成（流し方）や児童の反応、教具操作の難しさなど具体的な検証になりました。事後の授業研究では、児童が主体的に学び合うリモートによる授業や複式から単式に切り替えた活動なども探っていきたいとい



写真3「飛び込みによる検証授業」

う更なるアイデアも出されました。

(2) 上西小と国上小の連携 (小小連携)

(小規模校のデメリット解消④オンラインによる多様な見方・考え方の交流)

上西小と国上小は、両校とも完全複式の小学校です。1学年3名程度のため、交流に課題を抱えています。そのため、多様な見方・考え方に触れさせるために両校をオンラインでつないで授業を実施しました。

第2学年国語科「楽しかったよ2年生」では、それぞれの学校の授業で2年生が原稿を作成し、相手校の1・2年生に向けて発表する活動を行いました。その後、全員が感想を発表し、交流しました。



写真4 「オンラインで相手校に発表」

ア 成果：小規模校の枠を超えた多様な交流

普段少人数の同じ仲間と学習している児童にとって、他校の児童(1・2年生)に向けて発表したり、感想をもらったりすることは非常に大きな刺激となり、他者の存在を強く意識した充実した学習になりました。また、「相手校の1年生に自分の思いを伝える」という明確な目的と相手意識をもつことで、発表原稿の作成段階から、1年生にも分かりやすく伝えようとする表現の工夫につながりました。

さらに「オンラインでつなぐことが楽しい。」という姿があり、Microsoft Teams を用いた相手校とのリアル

タイム接続が、児童の「伝えたい」「聞きたい」という学習への意欲を大きく高めました。

イ 課題：持続可能な連携の体制確立

「発表を聞いて感想を言う」という一方向のやり取りにとどまらず、「オンラインでもっと話してみたい」という児童の様子が見られました。そのため、質疑応答や感想交換など、相互にやり取りができる双方向の交流の時間をどう生み出すかや、持続可能な連携にするためにも、時間、場所、単元のどの場面でオンラインを取り入れるか等を検討することが今後の課題です。

4 榕城小・下西小・種子島中の連携 (小中連携)

榕城小は各学年2学級、下西小も単式学級で本市では人数が多い学校です。種子島中は本市の唯一の中学校で、すべての小学校から児童が集まってきます。そこで規模や課題の共通した3校で小中連携を行っています。ここでは、学習・生活面での接続に加え、学習面での中学校教諭の専門性の活用に力点を置いて取組を進めています。

3 小中連携概念図

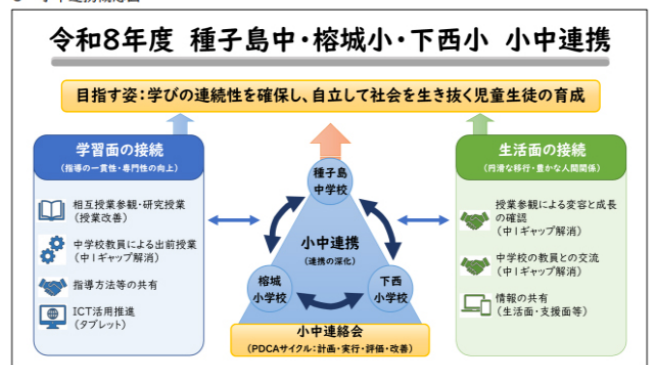


図2 「小中連携の構想図」

○ 集合学習での乗り入れ授業

市が実施している集合学習(全小学校6年生が集合)では、小中間の学びの接続を強化したり、中学校教諭

の専門性を生かした指導をしたりすることを目的として、中学校職員が小学校で授業を行っています。その後、職員で指導方法の共有と系統性の確認を行ったり、児童の中学校進学に向けた学習課題を把握したりすることで、次年度の連携計画に反映するための協議を実施しています。



写真5 「中学校教諭による小6への国語授業」

今後は、中学校での研究授業等に連携小学校の教諭が参加したり、小学校の生徒指導部会等があるときに中学校の生徒指導主任が参加したりするなど専門性を生かした更なる連携の強化をしていく予定です。

5 おわりに

この「小小連携」は小規模校のデメリットを解消し、職員の同僚性を補う手段であり、「小中連携」は、職員個々の専門性や経験を生かすための取組です。これにより、職員自身と児童生徒の主体性が向上する様子から成果を実感しています。

今後は、教師の研修システムの更なる充実に加え、児童が多様な見方・考え方に触れる機会を増やしたり、複式学級の教師が異学年の授業を担当し合うことにより複式解消につなげたりすることで小規模のデメリットを解消できるよう取組を推進していきます。